



発行者兼編集者  
鵜 戸 神 宮  
社 務 所  
印刷所  
西 日 本 印 刷

# 年 新 賀 禮

美 安 友 長 司 宮



新年あけまして  
おめでとうございます。

氏子崇敬者の皆様方におかれましては、希望にみちた新春をおむかえのことと存じ、お慶び申し上げます。

昨年は当神宮の桓武天皇延暦中興千二百年に当り、職員一同、記念事業及び奉祝祭等に従事いたし、十一月九日祭儀並びに式典を斎行し、皆様方と共に祝い申し上げた次第であります。

昭和四十三年より始めました境内整備も御本殿、社務所、儀式殿、楼

門等に至り、昨年の延暦中興千二百年記念事業で別当墓地整備・山門建設におよび、一応境内整備にピリオドを打った次第であります。これも偏に皆様方の御協力の賜物と感謝し厚くお礼申し上げます。

さて目を転じて世界の状況に向けますと、昨年、米国新大統領レーガンの、強い米国作り、又イラン国内紛争、サダト大統領暗殺による中東問題等種々な事が起り世界を驚かせ、又著しい日本の経済成長に反対して世界各国の反発も激しいものであります。

本年も内外共に多難の年かと存じますが、皆様方の健やかなる一年を祈念申し上げます御挨拶と致します。

明けまして  
おめでとうございます。

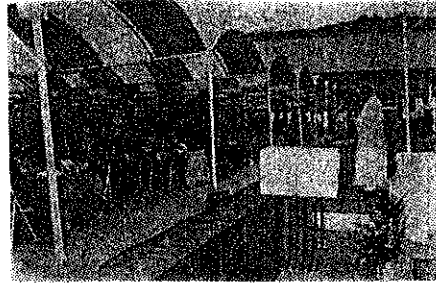


衆議院議員  
大原 一三

鵜戸神宮様の新年号新聞にて  
ご挨拶できますことを大変光栄  
に存じます。

去年十一月九日は、桓武天皇  
の延暦元年神殿を再興されて千  
二百年にあたる式典が、山門、  
墓地等の整備完工の祝賀と同時  
に取り行なわれましたことは、  
誠に慶賀にたえません。

長友宮司様とは、昭和四十三  
年の御本殿改修のとき、大蔵省  
におりまして、寄附免税の手続  
を致しました時以来のお付き合  
いであります。以来本日に親し



千二百年奉祝式典

く御指導をいただいております。  
また御子息の青島神社の宮  
司様とも大変ご昵懇に気易くお  
付き合い願っております。

県下第一の景勝の地に、しか  
も海岸の海蝕洞の中に鎮座しま  
す神宮の特異な結構は一般訪  
れた人々の脳裡に強く刻み込ま  
れざるをえない強い印象をもつ  
ています。それはまさに南国宮  
崎の象徴でもあります。

そして「鵜戸さん詣り」の民  
謡とともに、宮崎らしいその情  
緒の豊かさに、私は一種の誇ら  
しきを感じているもの一人であ  
ります。加うるに、青島神社  
がその同じ道程にあつて、しか  
も同じ海浜神社として、日本に  
ただ一つのヤシの原生林に囲繞  
された珍らしさだが、対をなし  
て観光者の宮崎についての印象  
を、いやが上にも高めていただ  
いていることは、まさに神慮と  
申す以外の何ものでもありません。

時世の変わり目の激しい昨今、  
人々の心も時として休らざと潤  
いを無くしかかることがしばし  
ばであります。しかし、無心に  
神前に顔くとき、ふと心の一番  
奥底をのぞき見る心地がして慄  
然とすることがあります。

特に余暇を持たない多忙な日  
常の中で、目先きのこと沈溺



靖国神社参拝の鈴木首相

しきっている随性の心は、時に  
神の叱正を受けなければならな  
いと思う。

また靖国神社の松原宮司様を  
はじめ、藤田権宮司様、さらに  
奉賛会の古川事務局長様には、  
故あって大変懇意にしていただ  
いているが、公式参拝、国家護  
持が、遅々として進まないこと  
がお気の毒でならない。  
しかし、徐々にではあるが、

いま問題解決へ前進を開始し始  
めたと思ふ。遺族の方々が  
神殿を去りやらず、いつまでも  
亡き戦没者の人々と心の対面を  
している姿を見ると、全くやり  
きれない気持ちにかり立てられる  
のです。

人は永遠に人である限り神仏  
を心のよすがとして生きる。と  
くに神話の国を郷里に持つわれ  
われはもつと郷土の歴史になじ  
む必要があると思ふ。宮崎の神  
社はすべてがわが建国の神話に  
ゆかりのものばかりであるよう  
に思ふ。その意味でも鵜戸さ  
ん、青島さんは宮崎人の心の原  
点にあるものとして永遠に生き  
つつけるであります。

新春に臨み、わが宮崎、そし  
て日本民族に御神慮を乗れさせ  
給え。



### 桓武天皇

## 延暦中興千二百年祝祭



儀式殿前参列

去る十一月九日当宮に於い  
て、昨年初めより計画されてい  
た桓武天皇延暦中興千二百年奉  
祝祭ならびに式典が盛大裡に催  
された。

当日はあいにくの曇り日の肌  
寒い一日であったが、神社本庁  
総代理、神社本庁理事、熊本  
県神社庁々長、阿蘇神社宮司阿  
蘇惟友様、生田神社宮司福田義  
又様、英彦山神宮宮司高千穂有  
英様、霧島神宮宮司小久保光雄  
様、鹿兒島神宮宮司岩重武己  
様、宮崎神宮宮司代理柳宜渡部  
司津佳様等の神宮関係者、又宮

崎県知事、宮崎市市長、日南市  
市長等をはじめ崇敬者方々三百  
五十名が奉祝祭ならびに式典に  
参加された。

奉祝祭は当宮の歴史にのつと  
るかの様に延暦寺山田座主の特  
使として大分県国東郡千燈寺住  
職今熊豪正様、道師として今山  
大師山住職野中玄雄様外天台宗  
九州東教区仏教青年会々員十六  
名も参列の上、午前十一時の号  
鼓を合図に祭典が斎行された。



宮司祝詞奏上



浦安の舞

宮司の祝詞奏上の後、浦安の舞  
がみやびやかに奉奏され神社本  
庁総代理阿蘇惟友様、各県代  
表の王串奉奠が行われ、無事祭  
典を終了した。

これより後、御本殿では延暦  
寺山田座主特使今熊豪正様をは  
じめ天台宗九州東教区仏教青年  
会の皆様方による法要がしめや  
かにとり行われ、岩屋の中に説  
経が約一時間程うずめつくして  
いた。

本殿の式典



尚、十二時より儀式殿前特設  
会場において記念式典が催さ  
れ、宮司挨拶に続き、奉祝祭記  
念事業請負関係者に感謝状と記  
念品が贈呈され、神社本庁総理  
代理阿蘇惟友様、宮崎県知事の  
祝辞をいただき、宝生流舞獅子  
が披露され式典を盛り上げた。

このあと日南市長川越光明様  
の酒杯の音頭で祝宴となり、地  
元中学生有志による「いさみ太  
鼓」、郷土民謡愛好会(佐伯藤風  
氏外六名)による民謡が数々披  
露され、又この日の為に作曲さ  
れ、献詠された岩切菊美様の詩  
吟が祝宴に華をそえた。生田神  
社宮司福田義文様が万歳三唱の  
音頭をとられ一時間半の式典を  
終了した。



宝生流舞獅子



天台宗の法要

### 奉納献詠

祝桓武天皇延暦中興千二百年奉  
祝祭 吟詠詩 櫻井社日東東林  
奉納者 櫻井社 奉納者 櫻井社

詠進 漢詩文(詠進者)  
英彦山神宮宮司岩重武己  
霧島神宮宮司小久保光雄  
鹿兒島神宮宮司岩重武己  
宮崎神宮宮司代理柳宜渡部

延暦中興千二百年祭を祝う



鷗戸神宮責任役員 日南市商工会議所会頭 河野宗泰

今から千二百年前、第五十代桓武天皇の宣命をうけた天台宗僧、光喜坊快久は、辺境の地、日向鷗戸山に社殿を再興し、併せて寺院を創建した。

光喜坊快久に勅命した桓武天皇は、奈良時代末期の素乱した当時の社会を一新するため、平安京(京都)を造営し、又奥羽で勢をはる蝦夷を征ぼすため、坂上田村麻呂に進軍を勅諭した果敢で英雄的気質をもった天皇であった。

この天皇のもとで後代、日本人の精神構造に多大の影響を与えた最澄と空海が活躍した時代でもあった。この様な時代から千二百年である。時間が過ぎ

長州、土佐藩等の若い下級武士の江戸幕府に象徴される旧体制に反撥する巨大なエネルギーによって成立した。一般民衆も又有能なアンチテーザーに煽動されたのであろうか各地の寺院を襲い仏像を破壊している。既肥藩も例外ではなかった。



慰霊碑

正月は一年のはじめで、昔から一年の区切りとして歳神さまを迎えて農耕の収穫を感謝するとともに、豊作を祈りたいせつな時期でした。



田山花袋にみる鷗戸参詣

七浦七阪

明治文学、自然主義の先覚者といわれる田山花袋が鷗戸を訪れ、その紀行文を残している。聞き、早速調べてみた。『日向地名録』の中に花袋の鷗戸参詣の紀行文を見ることができたが、何時の参詣なのか不詳であったため、『日本人名辞典』をひもときさらに調べ彼の生涯を追ってみた。

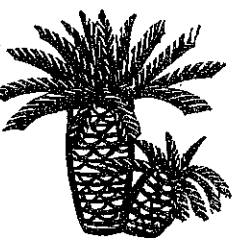
明治四年十二月、群馬県邑楽郡館林町に生まれ、幼くして父を失った花袋は母と共に苦勞を背負って少年時代を過ごしている。明治十九年に母と共に上京し、牛込に住み、桂園派の松浦辰男に和歌を学び、野島金八郎に英語を学んでいる。同二十四年に尾崎紅葉、江見水陰を訪ね、『千紫萬紅』に処女作『瓜畑』を発表して以来作家として活動をはじめた。雑誌『小桜城』『文学会』等に牧歌的、感傷的な作品を発表し、高い香気と解放された人間性を植えつけたロマンティズムの実践者として好評を博した。同三十二年太田和佐子と結婚、新声社より長篇『ふるさと』を発表し、続けて『野の花』『重右衛門の最後



七浦七阪

日向内の海港から鷗戸岬に至る間を七浦七阪と云う。沙浜と岬と相交錯した海岸で、小さい崖が幾つとなくある。岬の上からは弓弦を張ったような小さい湾が眩度見える。私は五里の間をいろいろなことを思いながら行つた「七浦の七浦ごと」に君を偲びやきし此日をわれ忘れめや」此歌を翌日日向の青島まで帰って来て、ピロウ樹など熱帯植物の茂る緑葉の陰で絵葉書に書いて、都の友に出した。

鷗戸岬は面白い処だと思ふ。是非一遊すべき処だと思ふ。此附近の海岸は岩質が軟かく、それには波濤の侵蝕作用が著しく働いて居るので、一面に畝をなして、波の寄する儘に高い低いひだを為している。なにがし博士は「鬼の洗濯板」という名を付けたそうだが、実際その通りだ。私其処を通る時は、丁度鷗戸の郵便局に勤めていて、毎日一度づつ内海まで通うと云う郵便脚夫と一緒に歩いた。肥つた背の高い男だった。山路で折って来た太いステッキをついていた。いそ／＼なことを話して聞かして呉れたが、例の土地訛



(田山花袋)

日は此界限の凱旋祭か何かで神社の石段のあたりを軍服を着けた当年の戦士がぞろ／＼上つて来るのに逢つたのを思出した。社務所の前には、神官や、禊言や、郡長らしい八字髪や、村長らしい羽織袴が一かたまりになつて、面白そうに立話をしていた。学校の生徒の群も先生に連れられて来て、其処に並んで居た。其中を脚絆草鞋の私が見た。

私は礼拝した。伊勢の大廟に詣でた時よりも、樞原宮に詣でた時よりも一層わが祖国を思ふの情に燃えた。日向と云へば、日本の果ての果ての国である。其国の果ての果ての絶端に来たということが少くとも私の感情をロマンチックにしたに相違なかつた。海に大きな岩が立つて居て、そこに波が凄まじく押寄せて来ては砕け散る。染めたやうな深い藍色の海は緩かに日影に揺れた。





